

特集  
大分  
豊の国 地域社会の未来像

Special Features  
OITA  
Local Communities in Future in the Country of Affluence

大分の県民性  
The Character of the People

## 大分の今日と明日

辻野 功

TSUJINO Isao

日本文理大学経営経済学部/教授



### 1——大分への大いなる誤解—赤猫根性

書店で県民性に関する本を立ち読みしてみるとよい。その殆んどが、大分の県民性を「赤猫根性」から説明している。例えば「大分県でよく耳にする言葉に『赤猫根性』というのがある。これはケチでがめつく、利己的、足を引っ張り合うばかりで協調性がないことを意味している」(岩中祥史『出身県でわかる人の性格—県民性の研究』草思社)とか「江戸時代に大分県域は八つの小藩に分けられて統治された。この小藩の競合の中から、大分県民の排他的で利己的な赤猫根性がつくられた」(武光誠『県民性の日本地図』文春新書)というふうにある。私もご多分にもれず大分着任前後に、このような本を読んだ。しかし大分の人に「赤猫根性の謂れは？」と聞いてみても、きちんと答えてくれた方はいなかった。そこで調べてみた。赤猫根性は臼杵藩の言葉であった。赤猫根性の謂れには諸説ある。一つは5万石の臼杵藩に藩の保護を受ける八つの特権商人町があった。その八町の外れの平清水に新興商人の町が出来、その商人は最初、八町の卸屋から品物を仕入れて商売していた。ところがだんだん力を増してくると、卸屋を通さず直買いして大きな利益を得るようになった。商品を卸していた特権商人から見れば、平清水の連中は恩知らずである。「犬は3日の恩を3年忘れず、猫は3年の恩を3日で忘れる」ということ、そして平清水の商店の紅がら格子から、蔑みの言葉として「赤猫根性」が生まれたのである。もう一つは「赤猫と念仏願い油断すな」とか「庄屋(名主)と赤猫に油断すな」といわれる如く、赤猫は油断も隙もない。平清水の新興商人は油断も隙もない「赤猫根性」の塊だと軽蔑したのだというのである。

しかし考えてみれば「赤猫根性」は平清水の新興商人



■図1—赤猫祭りのポスター(臼杵市観光情報協会提供)

の進取の気性を表す素晴らしい言葉ではないか。臼杵観光情報協会では「赤猫根性」を「商売上手」や「新しいことに積極的」と捉え直し、秋に「urusuki Akuma Matsuri」を開いている。

「足の引っ張り合い」などはどの県にでもあることで、小藩分立の歴史に刻印された大分には少し多いかなあという程度であろう。大分は九州で唯一ワールドカップを開催し、J1の「大分トリニータ」を持っている。お隣の熊本県も大分と同じ時期からサッカーチームを創る計画があった。しかし未だに成功していない。その原因を熊本の人は「肥後の引き倒し」という諺で説明している。「肥後の引き倒し」とは、「何かしようとすると周囲が足を

引っ張る」ことだそうである。54万石の大藩・熊本(肥後)藩を中心に高瀬藩3.5万石、宇土藩3万石、人吉藩2万石から形成された熊本県ですら、足の引っ張りあいの「肥後の引き倒し」が県民性だと言われているのである。八つの藩、三つの藩の飛び領地、二つの旗本領、天領日田、宇佐神宮領から形成され、トンネルの数が日本一の地勢の大分県がまとまりの悪いのは当たり前だが、「まとまりの悪さ」は日本中どの県にでもあることで、「赤猫根性」で大分を分かったつもりになることだけは、願い下げにしたいものである。

### 2——小藩分立の歴史がもたらしたもの

九州(即ち9カ国)のうち豊後・豊前・筑前・筑後・肥前・肥後の6カ国の守護であった大友宗麟(1530—87)は、九州随一の戦国大名であった。しかし南から勢力を伸ばしてきた島津に抗せず、豊臣秀吉の九州平定で辛うじて救われた。宗麟の跡を継いでいた義統は豊後のみが安堵された。その義統も朝鮮出兵の文禄の役において、最前線で苦戦する小西行長を救援せよとの命令を守らなかったとして豊後を没収された。豊後は細分化され、秀吉側近の家臣らに与えられた。徳川時代も小大名分立は変わらず、廃藩置県の時には、図2に示す如く奥平氏の中津藩(豊前 10万石)、松平氏(能見)の杵築藩(3.2万石)、木下氏の日出藩(2.5万石)、松平氏(大給)の府内藩(2.2万石)、稲葉氏の臼杵藩(5万石)、毛利氏の佐伯藩(2万石)、中川氏の岡藩(6.6万石)、久留島氏

の森藩(1.25万石)、更に島原藩の飛び領地(豊前1.35万石 豊後1.4万石)、肥後藩の飛び領地(2.3万石)、延岡藩の飛び領地(2万石)、旗本の時枝氏領(0.5万石)、旗本の立石(木下氏)領(0.5万石)、宇佐神宮領(豊前 0.1万石)、天領(10.4万石)の15の領地から大分県が形成された。

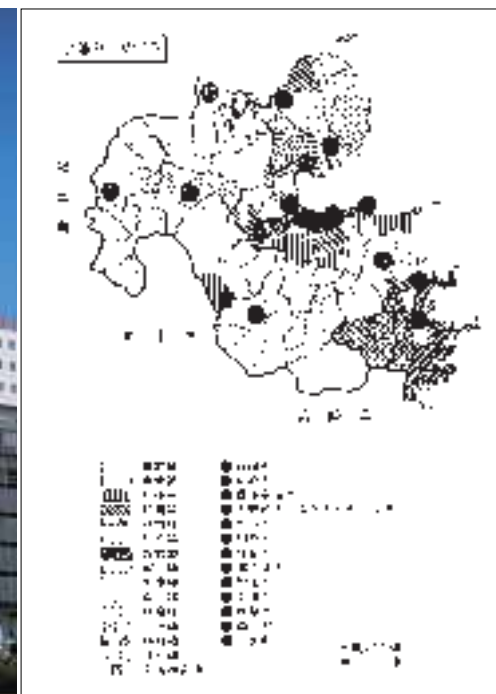
このようなことで大分県のまとまりが悪いのは、当然のことである。そしてそのまとまりの悪さを逆手に取って平松守彦知事が生み出したのが一村一品運動であることは、広く知られている。大分出身の筑紫哲也氏も言うように、一村一品運動の成功の原因の一つは「隣がやることは何でもやりたくない」という大分県民の気質である。この気質は自発性、オリジナリティーを尊ぶ精神につながる。この気質こそ国際化社会を生きていかなければならない、21世紀の日本人が身につけねばならない第一のものである。日本人はみんなと同じように考え行動することによって、精神の安定を得る。偽物でもよいからルイ・ヴィトンを持って落ち着くのである。これは国際的に見れば、幼稚園児の精神レベルである。欧米では、幼少の頃から他人と違うように考え行動することをプラスと評価する。物真似でなく独創を、独創までいなくても独自性が尊ばれるのである。そういう意味で大分県民は、欧米人の思考・行動様式に一番近い。大分県民は日本の先頭を歩んでいるのである。

一村一品運動は平松知事の引退・広瀬知事の誕生を機に新しい段階に入り、純粋に民間の運動となり、本年

4月からはNPO法人「大分県一村一品国際交流協会」(理事長平松守彦)に引き継がれて展開されている。NPO法人名に「国際交流」がついているように、一村一品運動はタイ・中国・インドネシアなどアジア諸国だけでなく、アフリカやヨーロッパ諸国にまで広がっている。昨年9月、タイのチェンマイで開かれた「一村一品サミット」には世界約30カ国・地域が参加した。本年度は中国で開催される。一村一品運動は日本で一番成功した地域間外交(ローカル外交)



■写真1—大友宗麟像—JR大分駅前



■図2—小藩分立時代の大分県



■写真2—大分トリニータを応援するサポーター(大分フットボールクラブ提供)

である。

一村一品運動は国内では小泉首相によって学ばれている。小泉内閣は2010年に来日外国人観光客を1000万人に倍増する観光立国宣言を2003年にしたが、その際、小泉首相は「『一村一品』運動の発想に学びながら『一地域一観光』を考えよう」と提唱したのである。

一村一品運動は、小藩分立がもたらしたまとまりの悪さを逆手に取って生み出した競い合いの文化である。大分の人材輩出も、競い合いの文化の最たるものである。福井俊彦・現日銀総裁は29代目にして初の大分出身の総裁である。大分県は4人・5代の総裁を生み出している。第5代山本達雄(臼杵市)、第9・11代井上準之助(日田市)、第18代一万田尚登(旧野津原町 現大分市)、第26代三重野康(臼杵市)の4人である。大東京都が4人であるから、人口が東京の10分の1の大分が生み出した日銀総裁の比重の高さが分るであろう。

ポツダム宣言受諾を決めた御前会議構成メンバー6名中、3人(阿南惟幾陸軍大臣・梅津次郎参謀総長・豊田副武軍令部総長)は大分の人であった。ミズリー号艦上においてマッカーサーの前で降伏文書に署名した日本代表は、重光葵外務大臣(杵築市)と梅津参謀総長(中津市)であった。阿南惟幾の名は大分の人のみならず、日本人すべての記憶に留めて欲しいものである。彼は本土決戦を唱えながら、辞表を出さず天皇のご聖断に従い、ポツダム宣言受諾の文書に副署してから割腹自殺をした。もし彼が辞表を提出していたら鈴木貫太郎内閣は瓦解し、軍部大臣現役武官制の下、後継内閣は本土決戦内閣以外にありえなかった。そうすれば沖縄戦に続いて九州上陸のオリンピック作戦、関東平野上陸のコロネット作戦が実施され、北からはソ連が北海道・東北地方へ侵攻してきたであろう。そして福島県から北は「日本民主主義人民共和国」となり、現在の北朝鮮のようになっていたかも知れない。なにしろルーズベルト大統領の下

■表1—大分トリニータ観客数

2004 J1リーグ観客動員数			
11月までの日別観客			
順位	チーム	総観客数	平均観客数
1	アビスパ福岡	192,238	27,939
2	浦和レッズ	146,000	26,909
3	川崎フロンターレ	131,515	25,439
4	横浜マリノス	119,212	24,818
5	大分トリニータ	108,006	21,889
6	鹿島アントラーズ	108,177	17,549
7	ジュビロ磐田	96,999	17,174
8	ヴィッセル神戸	95,021	15,193
9	名古屋グランパスエイト	95,696	15,112
10	セレッソ大阪	95,971	15,044
11	サンフレッチェ広島	92,000	14,999
12	徳島ヴォルティス	87,314	13,827
13	横浜FC	71,290	14,064
14	仙台サンプラザ	70,411	11,568
15	磐田フットボール倶楽部	67,432	10,573
16	ジェフユナイテッド千葉	67,187	10,012
17	FC東京	4,837,354	19,966

で作られた日本の占領計画では、福島県以北はソ連の占領予定地になっていたのであるから。

大分には競い合いの文化と共に統合の文化が育ちつつある。それは大分トリニータである。大分トリニータはJ1昇格の一昨年も昨年も、J1に残留できるかどうか、我々をばらはらさせた。今年の成績も良くはない。しかしながら観客数は素晴らしい。表1の如く第5位で、鹿島アントラーズやジュビロ磐田やヴィッセル神戸や名古屋グランパスより上なのである。特にヴィッセル神戸や名古屋グランパスより上というのは、人口を考えたとき凄いとしか言いようがない。阪神タイガースや中田ドラゴンズに4~5万のファンが行くのはありふれたことだが、大分では身銭を切って3万人近くの人が集まるのは、有史以来初めてのことである。大分トリニータはまとまりの悪い大分人をつなげる統合の文化であり、大分の宝である。私が年間シートを購入し、あるいは個人としてもスポンサー(最低年間5万円)になるべきだと講演の度に説いているのは、単にサッカーのチームを応援しようということではなく、大分人統合の文化・大分トリニータを育てようとの意からである。



■写真3—阿南惟幾記念碑—竹田市広瀬神社

### 3—大分の新しい動き

それは何と言っても、地域づくりと観光振興を一体化させる試みである。一昨年9月8日、植村修一・日銀大分支店長(現経済産業研究所上席研究員)らの呼びかけで「ツーリズム・シンポジウムおおいた2003」が開かれ、「地域づくりと一体になった観光政策への転換」・「地域振興・観光振興・文化交流などを一体的に推進する県庁部局の設置」などを県に提言した。その結果昨年4月には、県庁に「観光・地域振興局」が設置された。そして植村支店長と大分が誇る4人の「観光カリスマ」、即ち溝口薫平(湯布院町・由布院玉の湯会長)、鶴田浩一郎(別府市・ホテルニューツルタ社長)、首藤勝次(直入町・大丸旅館社長)、宮田静一(安心院町・県グリーンツーリズム研究会会長)が発起人になって「おおいた観光・地域づくりネットワーク」(座長溝口薫平)が設立され、民間から「観光・地域振興局」の活動を支援している。私も観光学の権威の小方昌勝・立命館アジア太平洋大学(APU)教授と共に副座長を務めている。本年3月25日には、大分県観光協会が観光振興と地域づくりを一体的に推進すべく「ツーリズムおおいた」に改組され、初代会長に桑野和泉さん(由布院温泉協会専務・由布院玉の湯社長)が選ばれた。公募された事務局長には、猪爪範子さん(東京農業大学講師・元由布院温泉観光協会事務局長)が就任した。

これらの組織で共通して強調されているのが、大分の魅力の情報発信である。大分の自然は、特に素晴らしい。例えば年1回「野焼き」をする久住高原の大草原は世界遺産になってもおかしくない価値がある。そこから車で3時間、蒲江町ではマリブルーの海を楽しむ。大分県には京都市や熊本市のように府県を代表する断トツの観光都市はない。しかし小藩分立の歴史から生み出された臼杵・杵築・佐伯・竹田・日田・宇佐・中津・豊後高田・由布院のような微妙に文化の異なる魅力的な中



■写真4—世界遺産登録の価値ある久住高原の草原(ユタカデザインセンター提供)

堅都市や町が各地にある。京都市を訪れば京都府観光をしたことになり、大阪市を訪れば大阪府観光をしたことになる。しかし大分県は周遊して初めて、大分県観光をしたことになるのである。ひな祭りでも「天領日田おひなまつり」・「岡藩城下町雛まつり」(竹田市)・「城下町中津のひなまつり」・杵築市の「雛めぐり」・豊後高田市の「おひなさまめぐり」と、競い合っている。

問題は情報発信である。大分県民は自慢をしないこと、PRしないことをもって美德としてきた。やっと今、これでは駄目だと気付き始めた。大分の優れた景観入りの年賀状・ハガキを作って情報発信しようと私が提案すると、すぐに県庁のホームページに「おおいた見ちよくれアルバム」が開設された。これは200枚の風景写真が市町村別に掲載されており、気に入った写真をパソコンに取り込んで風景写真入りのハガキが作成出来るのである。200枚の写真は、個人で「パノラマ写真で見る大分県」というホームページを開設している佐伯市の志賀本昌氏の提供である。

「豊の国かばす特命大使」に就任した植村・前日銀大分支部長は、「大分学講座 in 東京」を始めた。第1回目は本年3月18日に六本木の国際大学で開かれたが、大分学の提唱者として私が招かれ、「大分学事始め」と題して講演した。他府県に遅れてではあるが、「フィルムコミッションおおいた」の結成も提唱した。幸い10月からのNHKの朝の連続テレビ小説は、湯布院を舞台にした『風のハルカ』である。その撮影開始までには、「フィルムコミッションおおいた」も活動を開始しているであろう。優れた映画やテレビドラマのロケ地になれば、そこに住んでいる人々がその地域に誇りを持つようになる。大林宣彦監督の『なごり雪』のロケ地になった臼杵市は、その最も良い例である。大分の情報発信については、今後期待して頂きたいものである。



■写真5—美しいサンゴに出会える蒲江の海(蒲江観光協会提供)